

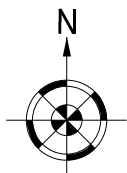
6 千住宿 ~ 草加宿

東京都足立区 千住新橋 ~ 梅島

(歩行距離 1871m 24分)

歩く地図でたどる日光街道

http://nikko-kaido.jp/
JZE00512@nifty.ne.jp



道標から東武線高架「梅島駅」

井沢 弥惣兵衛
徳川吉宗と同じ紀州藩の豪農の出身。享保7年(1722)に第8代将軍となった徳川吉宗の命を受け、灌漑や新田開発といった事業をする。利根川から水を取り入れ関東の稲作の収穫が飛躍的に伸びた。また、幕臣としても享保16年(1731)に勘定吟味役、享保20年(1735)に美濃国郡代に就任して活躍した。

佐竹稲荷神社
江戸時代、この辺りは秋田藩主佐竹家が所有した広さ約5200坪の抱屋敷地で、延宝8年(1680)には存在し享保3年(1718)までは周囲に囲われていた。当社はこの屋敷地の北東隅に位置し、屋敷神として祭られ、佐竹稲荷と呼ばれている。いほ稲荷とも称され、願を掛けるといほが取れるといひます。

梅田稲荷神社
梅田神明宮
禊(みそぎ)教で知られた神社で、天照大神を祀る。

梅田稲荷神社
境内建物は、社殿、神楽殿、手水舎、社務所である。神輿庫には、梅田の9町会の神輿が保管されている。また、社殿正面右手には、石不動尊が置かれている。年代不明の手洗石がある。(足立風土記稿より)

徳川吉宗
第7代将軍・徳川家継の死により第8代将軍に就任した。幕政改革を実施し幕府権力の再興に務め、増税と質素簡約による幕政改革、新田開発など公共政策、公事方御定書の制定、市民の意見を取り入れるための目安箱の設置などの享保の改革を実行した。水野忠之を老中に任命して財政再建を始める。定免法や上米令による幕府財政収入の安定化、新田開発の推進のため、紀州藩から井沢 弥惣兵衛(いざわ やすべえ、承応3年(1654)~元文3年(1738))を江戸に呼び、武蔵国の見沼干拓、見沼代用水開削、多摩川改修、下総国の手賀沼の新田開発などをさせた。足高の制の制定等の官僚制度改革、そしてその一環ともいえる大岡忠相(おおおか ただすけ 大岡越前守)の登用、また訴訟のスピードアップのため公事方御定書を制定しての司法制度改革、江戸町火消しを設置しての火事対策、悪化した幕府財政を立て直しなどの改革を図り、江戸三大改革のひとつである享保の改革を行った。また、大岡の整備、目安箱の設置による庶民の意見を政治へ反映、小石川養生所を設置しての医療政策、洋書輸入の一部解禁といった改革も行う。そして、第4代将軍・徳川家綱時代から続いていた学問を奨励する文治政治を見直し、武芸を奨励する武断政治を志した。

梅島
明治22年(1889)の町村合併で梅田村・島根村・小右衛門新田・栗原村を合併した際、中心となる梅田と島根から頭文字をとって梅島村が誕生し、これを基盤として昭和20年(1945)と昭和22年(1947)の二度の区画整理の実施を経て梅島町が成立したことに由来する。

東武鉄道梅島駅
「新編武蔵風土記稿」に古くは海に接し、のちに寄洲(きしゅう)となって開けたので「淵江村」と呼ばれたとあり、荒川放水路が(現荒川)全線通水後に発展。「四神地名録」に数多くの梅林をつくり...と記され、梅林があったことが偲(しの)ばれる。町村統合の際、梅田村の「梅」と島根村の「島」を合わせて村名とし、駅名にも命名された。

梅田
風土記の記述によると、その昔この地域は海に面した河口付近の沿岸地帯であったという記述が見られる。大河の河口部に当たるために堆積物が広がり、そこを埋め立てて新田が開かれたという。埋め立てられた低湿地帯のこの土地を「埋田」と呼び、それが美称されて「梅田」となったという。この地域は東京湾からも遠くなく、旧荒川(隅田川)が蛇行しながら流れている状況から、梅田が開発された頃は梅田付近が東京湾の入り江で、荒川の河口に隣接していたのだと推測される。

明王院参道
「子育八彦尊道 是より二丁行く」と刻まれた道標は明王院参道のこと。明王院は不動尊が朱塗りだったので赤不動といわれる。八彦尊像は子育てと咳の神様として庶民の信仰を集めた。応安2年(1369)作の木造如意輪観音菩薩座像がある。源為義の3男、志太郎先生(せんじょう)義広の開基。始め榎戸にあったものを移した。梅田の起源となる梅田天神がある。(上野下野道の記)

石不動尊
耳不動とも呼ばれるが、耳の病に苦しむ人がここに來て、治癒すれば竹筒に酒を入れて奉納する風習がありました。荒川放水路の堤にあったが昭和51年(1976)に移した。

川田橋
見沼代用水路を水源とする千住堀が流れていた。今は川の痕跡もないが、橋の名前が残っている。旧日光街道はこの千住堀に沿って北に進んでいた。

「右日光道中」「左東武鉄道旧線路跡」と刻まれている。

この道は荒川放水路ができる迄は東武鉄道の線路だった。

この道は荒川放水路ができる迄は東武鉄道の線路だった。

大正から昭和にかけて荒川ができたとき、日光街道は千住新橋を渡ることになる。

足立の由来

足立区という地名は「武蔵国足立郡」に由来している。武蔵国足立郡は大化の改新(645)の後、中国の制度にならい、全国に国郡里(後に郷)を設置したことに始まる。足立郡は、現在の埼玉県鴻巣市から足立区までの南北に細長い地域で、中央足立(郡衙)はさいたま市大宮付近にあったと推測されている。

「足立」の文字が確認できる最古の年代は奈良時代の天平7年(735)の長屋王邸出土木簡です。古代の地名は元来1音1字で表記されていましたが、元の語義を無視してでも、良い2文字を当てるように朝廷が推奨するようになった。「足立」は「阿太架」を当てたものと解されています。「阿太架」から「あだち」という転化は考えにくい。

足立区という区名になったのは昭和7年(1932)10月1日。当初「千住区」という案がありましたが、千住以北の南足立郡の人々がこれに反対し「南足立区」を主張しました。こうして、古来以来の郡名「足立」に決まりました。

「子育八彦尊道 是より二丁行く」と刻まれた道標は明王院参道のこと。明王院は不動尊が朱塗りだったので赤不動といわれる。八彦尊像は子育てと咳の神様として庶民の信仰を集めた。応安2年(1369)作の木造如意輪観音菩薩座像がある。源為義の3男、志太郎先生(せんじょう)義広の開基。始め榎戸にあったものを移した。梅田の起源となる梅田天神がある。(上野下野道の記)



道路の分岐点に道標

荒川放水路
明治43年(1910)8月、関東地方は非常に長雨が続いたため、荒川(現隅田川)および他の主要河川が軒並み氾濫し、東京府・埼玉県などで甚大な被害を引き起こす(関東大水害)。被害総数は、家屋流出1500戸、浸水家屋27万戸、死者223人、行方不明245人、堤防決壊300箇所、橋梁被害200箇所に及んだ。長年豪雨災害によって被害を受けていたこともあり、翌年(1911)政府は根本的な首都の水害対策の必要性を受け荒川放水路の建設を決定する。荒川放水路(あらかわほうすいりう)は、荒川のうち、岩淵水門から、江東区・江戸川区の区境の中川河口まで開削された人工河川を指す。途中、足立区千住地区、および墨田区・葛飾区の区境を経由し、全長22km、幅約500mを誇る。大正2年(1913)から昭和5年(1930)にかけて、17年がかりの難工事であった。

歩道橋をぐるっと回って下へ下りる。

coffee time

coffee time

coffee time

「梅島」駅を過ぎ商店街

道標から東武線高架「梅島駅」

佐竹稲荷神社

梅田稲荷神社

梅田稲荷神社

徳川吉宗

梅島

東武鉄道梅島駅

梅田

明王院参道

石不動尊

川田橋

この地域は東京湾からも遠くなく、旧荒川(隅田川)が蛇行しながら流れている状況から、梅田が開発された頃は梅田付近が東京湾の入り江で、荒川の河口に隣接していたのだと推測される。

明王院参道

この道は荒川放水路ができる迄は東武鉄道の線路だった。

大正から昭和にかけて荒川ができたとき、日光街道は千住新橋を渡ることになる。

足立の由来

足立区という地名は「武蔵国足立郡」に由来している。

「足立」の文字が確認できる最古の年代は奈良時代の天平7年(735)の長屋王邸出土木簡です。

足立区という区名になったのは昭和7年(1932)10月1日。

明王院参道



道路の分岐点に道標

荒川放水路

歩道橋をぐるっと回って下へ下りる。